

授業科目	摂食嚥下障害リハビリテーション		担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態			授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	基本的な訓練方法、訓練の実施、記録法、報告書作成を学び、リスク管理を念頭に置いた適切な活動ができる臨床能力を養う。					
到達目標	・疾患や障害の特徴や安全性を考慮し、適切な訓練・指導・支援を選択できる。 ・障害の全体像に基づき、訓練・指導・支援の優先順位を決定できる。 ・摂食・嚥下障害の検査、評価結果から、訓練プログラムを立案できるようになる。 ・嚥下調整食の適応、代替栄養法の適応が説明できるようになる。					
テキスト・参考図書等	(教) 脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名：藤島一郎・谷口洋 著 発行所：医歯薬出版 (参) 摂食嚥下ポケットマニュアル 著者名：藤島一郎(監) 発行所：医歯薬出版					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	100	定期試験により評価を行う。			
	レポート	0				
	小テスト	0				
	提出物	0				
	その他	0				
履修上の留意事項	摂食嚥下障害での解剖や理論的背景を復習しておくこと。					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容			
	1	治療・訓練の適応	リハビリテーションアプローチについて			
	2	姿勢と摂食嚥下	摂食嚥下時の姿勢について			
	3	食品調整	嚥下調整食、とろみ剤、嗜好			
	4	具体的な訓練法	治療的アプローチ			
	5	具体的な訓練法	治療的アプローチ			
	6	具体的な訓練法	治療的アプローチ			
	7	具体的な訓練法	代償的アプローチ（代替栄養法）			
	8	具体的な訓練法	環境改善的アプローチ（姿勢と介助）			
	9	具体的な訓練法	頭頸部腫瘍に対するアプローチ			
	10	チームアプローチ	嚥下チーム・NST・呼吸ケアチーム・WOC			
	11	目標設定	予後因子、ゴールと訓練の説明、家族指導			
	12	内科的治療と外科的治療	薬物療法、機能改善術、誤嚥防止術			
	13	気管切開のある患者への対処	カニューレの種類と特徴			
	14	リスクマネジメントについて	窒息・誤嚥への対応			
	15	摂食嚥下障害における倫理の問題	臨床倫理、経口摂取と肺炎の問題			

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	聴覚障害学Ⅱ		担当教員	教員 未登録	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	こどもの発達と聴覚障害の関連性について理解する。 発達段階に応じた評価、ハビリテーションの基礎知識と技法、援助について学ぶ。				
到達目標	・聴覚の正常発達について理解する ・検査、訓練について小児特有の工夫について考える ・養育者へのかかわりについて学ぶ				
テキスト・参考図書等	病気が見える 耳鼻咽喉科（メディックメディア） 言語聴覚士テキスト第4版（医歯薬出版株式会社）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合（%）	評価基準		
	評価内容		・定期試験にて評価を行う。		
	評価内容				
	評価割合	100			
	評価割合				
履修上の留意事項	積極的に発言し、自分のものとして学び取ること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	小児難聴のハビリテーションの概要	難聴児のハビリテーションの目的と考え方、養育者への指導		
	2	小児期の発達と難聴の影響	聴覚機能の発達、聴覚障害の影響		
	3	小児難聴の原因と病態①	遺伝性難聴・胎生期性難聴・周産期性難聴・後天性難聴など		
	4	小児難聴の原因と病態②	上記以外の疾患と病態、関連疾患など		
	5	小児難聴の評価①	関連情報の収集、小児聴覚検査		
	6	小児難聴の評価②	コミュニケーション発達検査、言語評価		
	7	小児難聴の評価③	発声発語評価、認知発達検査、その他		
	8	小児難聴の指導・支援①	ハビリテーションプログラムの立案、コミュニケーションモード		
	9	小児難聴の指導・支援②	乳幼児・幼児期		
	10	小児難聴の指導・支援③	学童期・成人期		
	11	小児難聴の指導・支援④	各発達段階の学習方法		
	12	障害認識へのアプローチ	発達段階ごとの特徴と指導、環境調整		
	13	軽度・中等度難聴児の課題	聴覚補償、言葉の発達		
	14	学校教育における指導と課題	歴史、指導体制		

	15	まとめ	まとめ・国家試験への対応
--	----	-----	--------------

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	言語学		担当教員	山田 敦士	
対象年次・学期	2 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
授業目的	言語聴覚士に不可欠な言語学的知識・分析技術の定着を図る				
到達目標	言語学に関する基礎的知識を用い、言語聴覚士として必要な分析ができる				
テキスト・参考図書等	大森孝一ほか編（2025）『言語聴覚士テキスト第 4 版』医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		期末試験および授業中の小テスト（数回）により評価する。		
	評価内容				
	評価割合	80			
	評価割合	20			
履修上の留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語学とは	言語学が取り扱う範囲、言語学の目的、言語学の歴史（概要）		
	2	言語学の基本的な性質 (1)	パロールとラング、通時態と共時態		
	3	言語学の基本的な性質 (2)	記号表現と記号内容、言語記号の恣意性と有契性		
	4	言語学の基本的な性質 (3)	二重分節、線状性、統合的關係と範列的關係		
	5	形態論 (1)	形態素、無標形と有標形、自由形態素と拘束形態素		
	6	形態論 (2)	形態論のプロセス（モノとしての形態素：複合、接辞、重複）		
	7	形態論 (3)	形態論のプロセス（ルールとしての形態素：母音変換、子音変換、短縮ルール：混成語、刈り込み、頭字語）		
	8	形態論 (4)	補充法と転換、異形態、連濁、派生文法と日本語文法		
	9	統語論 (1)	単文・節、複文、重文、従属節、主節		
	10	統語論 (2)	基本語順、項、付加語句、n 項動詞、品詞		
	11	統語論 (3)	ボイス（受け身・使役・間接受身、希望文・難易文・可能文・二重主語文）		
	12	統語論 (4)	格助詞（前接語、名詞句）、テンスとアスペクト		
	13	前半のまとめと復習	内的言語学のまとめ		
	14	意味論 (1)	語の意味		
	15	意味論 (2)	文の意味		

	16	語用論 (1)	ダイクシスと照応
	17	語用論 (2)	トピック・コメント・フォーカス・対比
	18	語用論 (3)	敬語、ウチとソト
	19	文字論	文字種
	20	言語と言語の関係 (1)	言語類型論
	21	言語と言語の関係 (2)	対照言語学
	22	社会言語学	記述主義と規範主義
	23	後半のまとめと復習	外的言語学のまとめ

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	精神医学	担当教員	鵜飼 渉		
対象年次・学期	2 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	8 回	時間数	15 時間
授業目的	医療人として必要な精神疾患の病態・診断と治療についての医学的知識を学ぶ。				
到達目標	精神疾患全般について、その原因・症状・検査法・治療法を理解する。 ①精神医学の方法 ②精神障害の分類 ③精神科症候学 ④精神疾患 ⑤ライフサイクル ⑥精神保健（メンタルヘルス）				
テキスト・参考図書等	（参）標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学 第 4 版 （改訂第 5 版） 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合（%）	評価基準		
	評価内容				
	評価内容				
	評価割合	100			
	評価割合				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	精神医学の方法	精神医学の歴史と概念 異常を判定する基準 精神医学特有の方法（了解、追体験、解釈など）		
	2	精神障害の分類	伝統的 분류（器質性、内因性、外因性） 国際的診断分類（ICD、DSM）		
	3	精神科症候学	精神機能の諸要素（意識、知覚、思考、記憶、言語、感情 意欲、行動、自我意識など）		
	4	精神疾患	1)器質性精神障害 2)精神作用物質関連障害		
	5	精神疾患	3)統合失調症 4)気分障害		
	6	精神疾患	5)神経症性障害 6)摂食障害		
	7	精神疾患	7)人格障害 8)精神遅滞、発達障害		
	8	ライフサイクル 精神保健（メンタルヘルス）	各年齢期の障害の特徴、精神障害の予防、産業精神医学、自殺		

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	言語聴覚障害学特論Ⅰ		担当教員	阿部 由美	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	言語聴覚療法の対象である失語症について、失語症検査・掘り下げ検査・評価技能を実技的に学ぶ				
到達目標	各種失語症検査を実施できる				
テキスト・参考図書等	特に指定しない				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	試験（筆記80%）、提出物20%から評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	0			
履修上の留意事項	SLTA同様、失語症患者に対する重要な評価となる。 実習に向け、講義時間だけでは習得に十分な時間がとれないので、各自空き時間に積極的に検査練習を行うこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	失語症の評価	CADL 検査とは		
	2	失語症の評価	CADL 検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	3	失語症の評価	CADL 検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	4	失語症の評価	WAB 失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	5	失語症の評価	WAB 失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	6	失語症の評価	WAB 失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	7	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストとは		
	8	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストの構成、 統合と解釈について 検査演習		
	9	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストの構成、 統合と解釈について 検査演習		
	10	失語症の評価	TLPA・重度失語症検査		
	11	失語症の評価	SALA 失語症検査		
	12	失語症の評価	SALA 失語症検査		
	13	失語症の評価	SALA 失語症検査		
	14	失語症の評価	SALA 失語症検査		

	15	失語症の評価	症例、統合と解釈
--	----	--------	----------

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	歯科医学総論		担当教員	高師 則行	
対象年次・学期	2 年・後期		必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数 15 時間
授業目的	歯・口腔・顎・顔面領域の機能・解剖や疾患について学び、言語聴覚士として必要な知識を身につける。				
到達目標	・一般的な歯科診療について理解する ・口腔・顎・顔面領域の疾患と治療の流れを理解する				
テキスト・参考図書等	(教) 最新言語聴覚学講座 臨床歯科医学・口腔外科学 著名：道 健一 発行：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		定期試験により評価を行う。		
	評価内容				
	評価割合	100			
	評価割合				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	歯・口腔の構造	歯の構造・発生・萌出・歯周組織の構造、舌、唾液腺		
	2	歯・歯周組織の疾患と治療	う蝕、歯周炎、保存、補綴、歯科矯正、咀嚼障害などの治療		
	3	歯・歯周組織の疾患と治療	う蝕、歯周炎、保存、補綴、歯科矯正、咀嚼障害などの治療		
	4	口腔ケア	う蝕、歯周炎、保存、補綴、歯科矯正、咀嚼障害などの治療		
	5	摂食嚥下障害	口腔機能が関わる摂食嚥下障害解剖、生理、歯科医学的対応		
	6	顎・顔面・頸部の構造	口腔顎顔面の病態に関わる解剖		
	7	口腔顎顔面の炎症	炎症の基本、歯性感染症、特異性炎		
8	加齢による口腔機能障害と歯科医学的対応	加齢による口腔機能の変化について			

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
----------------------	--	--

授業科目	器質・機能性構音障害	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	2年・通年	必修・選択区分		単位数	
授業形態		授業回数	23回	時間数	45時間
授業目的	機能性構音障害・器質性構音障害について理解する。				
到達目標	各構音障害の定義から基礎的知識、臨床への応用までを学ぶ。 構音障害の基礎や検査方法、実際の教材の研究や指導のカリキュラムの立て方などを学ぶ。				
テキスト・参考図書等	(教)：最新言語聴覚学講座 臨床歯科医学・口腔外科学 監修：道健一 発行所：医歯薬出版 構音障害の臨床―基礎知識と実践マニュアル― 改訂第2版 著者名：阿部雅子 発行所：金原出版 (参)：言語聴覚士テキスト				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容	定期試験	定期試験・小テストにより評価を行う。		
	評価内容	小テスト			
	評価割合	85			
	評価割合	15			
履修上の留意事項	欠席せず、教科書および授業で配布された資料、授業のメモに基づき理解を深めること。 授業で実施する国家試験形式問題を解けるようになること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	器質性構音障害について	発声発語器官の発生、器質性構音障害とは		
	2	器質性構音障害について	口唇口蓋裂、滲出性中耳炎		
	3	器質性構音障害について	口唇口蓋裂、滲出性中耳炎		
	4	器質性構音障害について	先天性鼻咽腔閉鎖不全症		
	5	器質性構音障害について	簡易検査・機器を用いた検査		
	6	器質性構音障害について	医学的アプローチ		
	7	器質性構音障害について	言語聴覚士による訓練		
	8	器質性構音障害について	口腔疾患による構音障害、治療	チームアプローチについて	
	9	器質性構音障害について	口腔疾患による構音障害、治療	チームアプローチについて	
	10	器質性構音障害について	口腔疾患による構音障害、治療	チームアプローチについて	
	11	歯科口腔外科における器質性構音障害	口腔諸器官の形態異常、顎変形症		
	12	歯科口腔外科における器質性構音障害	口腔内圧形成不全、特に鼻咽腔閉鎖不全		
	13	機能性構音障害について	機能性構音障害とは・構音の仕組み		

	14	機能性構音障害について	日本語の構音・小児の構音発達
	15	機能性構音障害について	構音の誤り①
	16	機能性構音障害について	構音の誤り②・機能性構音障害の評価
	17	機能性構音障害について	新版構音検査の概要・演習・まとめ
	18	機能性構音障害について	新版構音検査の概要・演習・まとめ
	19	機能性構音障害について	新版構音検査の概要・演習・まとめ
	20	機能性構音障害について	機能性構音障害の訓練
	21	機能性構音障害について	機能性構音障害の訓練
	22	機能性構音障害について	機能性構音障害の訓練
	23	機能性構音障害について	まとめ

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	失語症リハビリテーション		担当教員	高倉 祐樹	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	失語症の評価結果に基づいて言語症状を診断し、治療・援助を行なうプロセスと手法を学ぶ。				
到達目標	・ 基本的な訓練プランの立て方を学ぶ。 ・ 病期別の訓練の考え方を学ぶ。 ・ 個々の障害に焦点を当てた訓練を考えられる。 ・ 社会復帰における言語聴覚士の役割を理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) 失語症 臨床標準テキスト 医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		定期試験にて評価を行う。		
	評価内容				
	評価割合	100			
	評価割合				
履修上の留意事項	予習・復習にも力を入れて学習すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	2	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	3	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	4	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	5	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	6	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	7	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	8	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	9	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	10	社会復帰	社会復帰と社会適応、言語聴覚士の役割		
	11	社会復帰	社会復帰と社会適応、言語聴覚士の役割		
	12	小児失語	小児失語症の原因・症状・評価・治療・援助		
	13	症例検討	症例について		
	14	症例検討	症例について		

	15	症例検討	症例について
--	----	------	--------

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	子どもの障害の援助技術Ⅱ		担当教員	佐々木 勇輝	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	言語発達障害の評価の目的と方法について理解する。 児童に対し、言語発達検査を実施できる。				
到達目標	心理検査（発達検査、言語検査）ができる。				
テキスト・参考図書等	（参）言語発達障害学（医学書院）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合（%）	評価基準		
	評価内容		筆記試験と小テストで評価する。		
	評価内容				
	評価割合	90			
	評価割合	10			
履修上の留意事項	欠席せず、教科書および授業で配布された資料、授業のメモに基づき理解を深めること。 授業で実施する国家試験形式問題を解けるようになること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	総論	オリエンテーション 心理検査/言語発達検査の位置づけ		
	2	言語検査	PVT-R 絵画語彙発達検査		
	3	言語検査	LC スケール		
	4	言語検査	LC スケール		
	5	言語検査	LC スケール		
	6	保育園実習	児童に LC スケール、PVT-R、新版構音検査を実施する		
	7	保育園実習	児童に LC スケール、PVT-R、新版構音検査を実施する		
	8	言語検査	S-S 法言語発達遅滞検査		
	9	言語検査	S-S 法言語発達遅滞検査		
	10	言語検査	S-S 法言語発達遅滞検査		
	11	発達検査	遠城寺式乳幼児分析的発達検査		
	12	知能検査	田中ビネー知能検査		
	13	その他検査	S-M 社会生活能力検査、Vineland-1 適用行動尺度、DENVERⅡ、日本語マッカーサ乳幼児言語発達質問紙		
	14	臨床実習への応用	各種検査をどのような児童に実施するかを理解する		
15	国家試験問題	国家試験問題を解く			

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	肢体不自由児障害		担当教員	永野 勢津子	
対象年次・学期		必修・選択区分		単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的					
到達目標					
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容				
	評価内容				
	評価割合				
	評価割合				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
----------------------	--	--

授業科目	聴覚検査法		担当教員	岡崎 聡子	
対象年次・学期		必修・選択区分		単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的					
到達目標					
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容				
	評価内容				
	評価割合				
	評価割合				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
----------------------	--	--

授業科目	聴覚心理学		担当教員	阿部 純一	
対象年次・学期	2 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	人間の“聴こえ”のメカニズムを学ぶ。また、聴覚特性を理解する。				
到達目標	聴こえに対応する音の物理的特性を知る。人間の聴覚特性を知る。				
テキスト・参考図書等	配布資料 および 参考図書： 「Crosslink 言語聴覚療法テキスト 音響・音声学 編集；竹内京子、稲田朋晃 メディカルビュー社 2023 年」				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		基本的に定期試験にて評価を行う。		
	評価内容				
	評価割合	80			
	評価割合	20			
履修上の留意事項	物理的な音響があるから聞こえるのではない。聞く・聞こえるという人間の内的メカニズムがあるから聞こえる。そのメカニズムを理解する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	音と聴覚システム（聴覚系）	音の物理学的記述		
	2	音と聴覚システム（聴覚系）	聴覚系の構造と聴覚神経系の反応		
	3	音の心理物理学	音の物理的特性とそれに対応する心理的属性		
	4	音の心理物理学	音の大きさ（ラウドネス）、音の高さ（ピッチ）、音色、音の時間的特性への感覚		
	5	聴覚の周波数特性	可聴範囲、周波数特性、絶対閾・感覚閾、弁別閾		
	6	マスキング現象	臨界帯域、聴覚フィルター		
	7	マスキング現象	同時マスキング、継時マスキング、中枢性マスキング		
	8	両耳聴	両耳の心理的效果、空間感覚、音源定位、カクテルパーティー効果		

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	コミュニケーション論Ⅱ		担当教員	埜瀬 充功		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態			授業回数		時間数	
授業目的	患者様・利用者及び家族、多職種スタッフとのコミュニケーションについての必要性、重要性を学ぶ。					
到達目標	病態、病期に合わせた患者様・利用者及び家族とのコミュニケーションの工夫。多職種スタッフとのコミュニケーションの取り方などを理解、実践できる。					
テキスト・参考図書等	配布資料に基づく					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	100	定期試験と演習への取り組み態度を総合して評価する。授業への取り組み態度は、記録用紙に書かれた内容の到達度によって評価する。			
	レポート					
	小テスト					
	提出物					
	その他					
履修上の留意事項	グループワークを多く実施します。グループワークでの積極的な参加、発言をお願いします。					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容			
	1	コミュニケーション論Ⅰの振り返り 多職種連携とチーム医療	コミュニケーション論Ⅰの振り返りと多職種連携とチーム医療について学ぶ			
	2	チームアプローチの基本構造	チームアプローチの基本構造について学ぶ			
	3	リーダーシップ論	リーダーシップ論について学び、グループワークを通して実践する			
	4	チームアプローチの基本構造における課題と対応	チームアプローチの基本構造における課題と対応についての理解			
	5	対象別のコミュニケーション	対象別のコミュニケーションについての理解と実践			
	6	多職種連携との（急性期から回復期）コミュニケーション	多職種連携との（急性期から回復期）コミュニケーションについての理解と実践			
	7	多職種連携との（維持期から在宅）コミュニケーション	多職種連携との（維持期から在宅）コミュニケーションについての理解と実践			
	8	まとめ	これまでの授業の振り返り テスト範囲の説明			

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	統計学	担当教員	島森 美光		
対象年次・学期	2 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	8 回	時間数	
授業目的	統計の基本的な考え方を理解し、データの取り扱い方法を修得する。				
到達目標	データを図表化し、その特徴を数値で表すことができる。基本的な推定や検定の方法を理解する				
テキスト・参考図書等	(教)「やさしい統計学」、小林克彦監修、池田書店				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		定期試験結果にて評価する		
	評価内容				
	評価割合	100			
	評価割合				
履修上の留意事項	ルート機能が付いた電卓があれば持参のこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	データの取り扱い	統計学の概要、代表値		
	2	データの記述	散布度		
	3	データの特徴を図で表わす	グラフの種類と特徴、尺度		
	4	二つのデータの関連性	散布図と相関		
	5	推定	点推定と区間推定		
	6	仮説検定（1）	仮説検定の方法		
	7	仮説検定（2）	平均値の検定と独立性の検定		
8	多変量解析	回帰分析			

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	臨床神経学	担当教員	中村 仁志夫		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数		時間数	
授業目的	リハビリテーション計画を作成するうえで欠かすことができない神経系の基本的な構造と働きについて説明し、その上で主要な障害（疾患）のおこり方を理解してもらうことで、医療専門職としての基本的認識を獲得させる。				
到達目標	神経系の成り立ちと働きおよび代表的疾患（病態）について学習し、体系的知識を獲得しながら専門職としての臨床的応用に備えることを目標とする。				
テキスト・参考図書等	（教）「病気が見える」第7巻 脳・神経系」第2版 著者名：尾上尚志ら 発行所：メディック・メディア （参）「医療系学生のための病理学」第5版 著者名：中村仁志夫ら 発行所：講談社 「日本人の脳」（言語聴覚学では必読） 著者名：角田忠信 発行所：大修館書店				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合（%）	評価基準		
	評価内容		筆記試験（80点満点）と提出物（40点満点）とを合わせた総合点（120点満点）で評価を行う。 ※ 試験は80点満点。提出物は1回5点満点（欠席した場合は公欠も含め2点減点）		
	評価内容				
	評価割合	67%（※）			
	評価割合	33%（※）			
履修上の留意事項	1)ノート作成に血道をあげ過ぎず、教科書等には書き込みや文献引用の付箋貼付をする方が効率的であり、索引を活用して的確な情報を得ること。 2)解剖学・生理学の知識は絶えず復習すること。 3)おっくうがらずに辞典・辞書を引くこと。 4「現代用語の基礎知識」などを読むこと。 5)日常的に新聞や雑誌の医療関係の記事をよく読むこと。できれば記事の切り抜き帳を作ると知識の積み重ねが得られるであろう。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	神経系の解剖と生理（1）	神経細胞の特殊性とグリア細胞の役割、脳機能の局在、高次脳機能の配置、優位半球と劣位半球、脳血管の解剖。、髄液循環、血液脳関門		
	2	神経系の解剖と生理（2）	運動系：錐体路と錐体外路系、感覚系：表在感覚と深部感覚、自律神経系：交感神経系と副交感神経系		
	3	神経症候学 （1）麻痺の呼び方、失語症、意識障害 （2）神経学的検査法の意義と関連する病態			
	4	脳血管障害 頭部外傷（coup と contre-coup）	脳卒中（脳梗塞、脳出血、くも膜下出血）、一過性脳虚血発作（TIA） 頭蓋骨骨折、脳挫傷、硬膜外血腫、硬膜下血腫（急性と慢性）		
	5	神経系の感染症 （1）髄膜炎と脳炎	細菌性感染症、ウイルス性脳炎、带状疱疹、日和見感染と潜伏感染		

		(2) 脱髄疾患、自己免疫疾患、先天性疾患	多発性硬化症、膠原病（SLE など）、橋本病、Chiari 奇形など
	6	系統変性疾患 (1) 錐体路系と錐体外路系 (2) 脊髄小脳変性症	運動ニューロン病（ALS など）、パーキンソン病とパーキンソン症候群、ハンチントン病など、多系統萎縮症、ポリグルタミン病
	7	(1) 脳腫瘍、腫瘍性疾患、母斑症 (2) 神経筋疾患 (3) 末梢神経障害、栄養障害性疾患	グリオーマ、髄膜腫、下垂体腺腫、シュワン細胞腫、松果体腫瘍、フォン・レックリングハウゼン病など" 筋ジストロフィー症（デュシェンヌ型など）、重症筋無力症、多発性筋炎、皮膚筋炎 "糖尿病性ニューロパチー、がん性ニューロパチー、ギラン・バレー症候群、ウェルニッケ脳症（ビタミン B1 欠乏）、脊髄連合変性症（ビタミン B12 欠乏）
	8	認知症 (1) 変性性と脳血管性 (2) プリオン病（急性進行性認知症）	アルツハイマー型、レビー小体型、前頭・側頭型および脳血管障害に伴うもの クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD：孤発性と家族性）ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー症候群（GSS：家族性） 牛海綿状脳症など（BSE ほか：伝播性）

授業科目	臨床神経学	担当 教員 実務 経験	中村 仁志夫 有：■ 無：□	北海道大学医療短大部で 22 年、同医学部保健学科 で 3 年 教員として勤務
対象年次・学 期	2 年・後期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	高次脳機能障害リハビリテーション		担当教員	藪 貴代美	
対象年次・学期		必修・選択区分		単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的					
到達目標					
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容				
	評価内容				
	評価割合				
	評価割合				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		

授業科目	高次脳機能障害リハビリテーション	担当教員 実務経験		
対象年次・学期		担当教員		
授業形態		実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

担当 教員 実務 経験		
----------------------	--	--

授業科目	臨床心理学		担当教員	風間 雅江	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	臨床心理学の基本理論、および心理臨床の実践的アプローチについての専門的知識を習得することを目的とする。				
到達目標	代表的理論モデル、人格理論、心理アセスメント、異常心理学、ライフサイクルの各段階における心理的問題、心理療法の諸技法等について理解することを目標とする。心理検査については、実践を通して体験的に理解する。				
テキスト・参考図書等	(教)よくわかる臨床心理学 改訂新版 著者名：下山晴彦 (編) 発行： ミネルヴァ書房				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		定期試験、レポート、平常時の提出課題を合わせて評価する。		
	評価内容				
	評価割合	60			
	評価割合	40			
履修上の留意事項	医療専門職に求められる人間理解と心理的支援のあり方について、講義での学びを通して、改めて問い直し洞察を深めるように意識してください。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	臨床心理学とは何か	臨床心理学の構造、臨床心理学の歴史、理論と実践の関係、他		
	2	基本理論	ナラティブ・アプローチ、エビデンスベースト・アプローチ、生物－心理－社会モデル、他		
	3	人格理論	類型論、特性論、性格検査体験、他		
	4	心理アセスメント	アセスメントの目的、面接法、観察法、質問紙法、投影法、他		
	5	異常心理学	さまざまな精神障害および精神症状の理解と支援、他		
	6	乳幼児期と心理的課題	生涯発達の視点、乳幼児期の特徴、さまざまな発達理論、発達検査、乳幼児期の心理的課題と心理的支援、他		
	7	児童期と心理的課題	児童期の特徴、発達障害、児童期の心理的問題と心理的支援、他		
	8	思春期・青年期と心理的課題	思春期の定義、青年期の位置づけ、思春期・青年期の特徴、アイデンティティの確立、思春期・青年期の心理的問題と心理的支援、他		
	9	中年期と心理的課題	中年期の特徴、転換期に潜む危機、中年期の身体的・心理的・社会的変化、中年期の心理的課題と心理的支援、他		
	10	高齢期と心理的課題	高齢期の特徴、老年的超越、高齢期の心理的課題と心理的支援、他		
	11	クライアント中心療法	クライアント中心療法の歴史、ロジャーズの理論と展開、他		
	12	認知行動療法	行動療法、認知療法、認知行動療法の理論と展開、他		

	13	マインドフルネスを用いた心理療法	マインドフルネスの概念、マインドフルネスに基づく心理支援の理論と展開、マインドフルネス体験、他
	14	日本で生まれた心理療法	森田療法、内観療法、臨床動作法のそれぞれの理論と展開、他
	15	精神分析、分析心理学	フロイトの精神分析理論、防衛機制、ユングの分析心理学の理論と展開、他

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	高次脳機能障害演習	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	3 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	臨床実習に向けて、高次脳機能障害の検査を学ぶ				
到達目標	・ 各種高次脳障害の検査の概要を理解できる ・ 各種検査を適切に実施することができる ・ 適切な検査の選択、実施ができ、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案ができる ・ 報告書の作成について理解できるようになる				
テキスト・参考図書等	(教) 標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第3版 医学書院 (参) 高次脳機能障害ポケットマニュアル第4版 医歯薬出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	試験	100	・ 試験評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	検査が多岐にわたるため、それぞれ手技やや内容をしっかり復習し慣れておくこと				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	知能検査	WAIS-III・IV		
	2	知能検査	WAIS-III・IV		
	3	知能検査	WAIS-III・IV		
	4	知能検査	WAIS-III・IV		
	5	記憶検査	WMS-R、リバーミード、レイの複雑図形、三宅式 (S-PA)		
	6	記憶検査	WMS-R、リバーミード、レイの複雑図形、三宅式 (S-PA)		
	7	注意検査	CAT 、かなひろいテスト、Stroop テスト、TMT		
	8	注意検査	CAT 、かなひろいテスト、Stroop テスト、TMT		
	9	遂行機能検査	FAB、BADs		
	10	遂行機能検査	FAB、BADs		
	11	無視検査	BIT		
	12	無視検査	BIT		
	13	失行・失認検査	SPTA、VPTA		
	14	事例検討	事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う。		
	15	事例検討	事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う。		

授業科目	高次脳機能障害演習	担当 教員	松山大輔	道内急性・回復期病院で言語聴覚士として 5 年間勤務
		実務 経験	有：■ 無： □	
対象年次・学期	3 年・前期	担当 教員	阿部由美	言語聴覚士として市内病院にて 14 年、訪問看護ステーションにて 4 年勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無： □	
		担当 教員	佐々木勇輝	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として 6 年勤務
		実務 経験	有：■ 無： □	
		担当 教員	埜瀬充功	道内病院で言語聴覚士として 7 年勤務
		実務 経験	有：■ 無： □	
		担当 教員		
		実務 経験		
		担当 教員		
		実務 経験		
		担当 教員		
実務 経験				

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	心理測定法	担当教員	阿部 純一		
対象年次・学期	2 年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	8 回	時間数	15 時間
授業目的	言語聴覚士に必要な心理測定技法、尺度構成技法、調査技法、データ処理技法などを学ぶ。				
到達目標	諸技法を習得するとともに、それらの基礎にある、人間の心理や行動を客観的に把握するための基本的姿勢を理解する。				
テキスト・参考図書等	配布資料（数種類）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		基本的に定期試験にて評価を行う。		
	評価内容	その他			
	評価割合	80%			
	評価割合	20%			
履修上の留意事項	心理学とは、人間の心理と行動のメカニズムを解明し、合理的に説明しようとする科学である。そこでは客観的な方法論が必要とされることをよく理解する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	精神物理学（心理物理学）的測定法	閾値の測定、恒常誤差		
	2	精神物理学（心理物理学）的測定法	調整法、極限法、恒常法		
	3	信号検出理論	感度と判断基準の違い		
	4	尺度構成法	尺度水準、順位法、評定法、一対比較法		
	5	尺度構成法	比率尺度構成法、多次元尺度構成法		
	6	調査法	サンプリング、質問紙法		
	7	データ処理技法	因子分析		
	8	テスト理論	標準化、妥当性、信頼性		

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	構音障害演習		担当教員	阿部 由美	
対象年次・学期	2 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	運動障害性構音障害の対象者に対して、基本的検査・評価技能を実技的に学ぶ。				
到達目標	運動障害性構音障害の対象者に対して、標準ディサースリア検査の評価手技を習得する。				
テキスト・参考図書等	適宜、資料を配布する。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	試験	90	定期試験 90%、小テスト 10%により評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	10			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	忘れ物なく、欠席なく授業に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	運動障害性構音障害の評価	評価とは、検査される側になってみよう		
	2	検査	(スクリーニング含む検査)、SLTA－ST (1)		
	3	検査	SLTA－ST (1)		
	4	検査	SLTA－ST (1)		
	5	検査	AMSD		
	6	検査	AMSD		
	7	検査	AMSD		
	8	検査	AMSD		
	9	検査	AMSD		
	10	訓練、報告書	構音障害の訓練 (様々な訓練)		
	11	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方 (問題点・目標の見つけ方)		
	12	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方 (問題点・目標の見つけ方)		
	13	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方 (問題点・目標の見つけ方)		
	14	ICF に基づいた評価結果の解釈	言語聴療法の進め方 (様々な訓練法の実際)		
15	ICF に基づいた評価結果の解釈	言語聴療法の進め方 (様々な訓練法の実際)			

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	内科学	担当教員	沼田 泰尚		
対象年次・学期	2 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	各臓器系統別に疾患の成り立ちと診断・治療上の要点を学ぶことを目的とする				
到達目標	人間の基本的構造とその機能をコントロールする 3 つのシステムである神経系、内分泌系、免疫系がどのようにして細胞レベル、組織レベル、個体レベルの機能維持とかわりを有しているかを学び、それをリハビリテーションに応用する。リハビリテーションにおいても分化と統合の時代となっている。				
テキスト・参考図書等	(教) Crosslink basic リハビリテーションテキスト 内科学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	人体の機能と疾患をよく理解することは、言語聴覚士にとって重要です				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	生体学総論	総論		
	2	動物としての骨・関節・筋疾患	骨・関節・筋の機能と疾患の診断と治療		
	3	神経（ニューロン）による細胞性コントロール	脳・神経系機能と疾患の診断・治療		
	4	内分泌（ホルモン）による液性コントロール	内分泌の機能と疾患の診断・治療		
	5	免疫（細胞性・液性）によるコントロール	免疫の機能とアレルギー・膠原病の診断・治療（白血球）		
	6	消化器系疾患	消化器（消化管・肝・胆・膵）の機能と疾患の診断・治療		
	7	消化器系疾患	消化器（消化管・肝・胆・膵）の機能と疾患の診断・治療		
	8	消化器系疾患	消化器（消化管・肝・胆・膵）の機能と疾患の診断・治療		
	9	代謝系疾患	代謝疾患の診断・治療		
	10	代謝系疾患	代謝疾患の診断・治療		
	11	循環器系疾患	循環器（呼吸器・心血管・腎）の機能と疾患の診断・治療		
	12	循環器系疾患	循環器（呼吸器・心血管・腎）の機能と疾患の診断・治療		
	13	循環器系疾患	循環器（呼吸器・心血管・腎）の機能と疾患の診断・治療		
	14	血液造血器疾患	血液の機能と疾患の診断・治療（赤血球、血小板）		

	15	血液造血器疾患	血液の機能と疾患の診断・治療（赤血球、血小板）
	16		

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	失語症Ⅱ	担当教員	藪 貴代美		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数		時間数	
授業目的	失語症の言語治療は言語・コミュニケーションの問題点の把握から始まる。単に検査を実施するだけでなく、その結果を意味付けすることが重要である。この授業ではコミュニケーション能力、予後予測をするために、原因、発生メカニズムを検討し検査や面接で収集した情報を分析・統合する方法を学ぶ。				
到達目標	・代表的な失語症検査の解釈について学ぶ。 ・評価サマリーの作成の仕方について学ぶ。				
テキスト・参考図書等	(教) 失語症 臨床標準テキスト 医歯薬出版 (教) なるほど！失語症の評価と治療 金原出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	試験	80	定期試験と提出物を合わせて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	0			
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	復習	失語症の症状		
	2	復習	失語症の検査		
	3	評価・診断の原則	ICF に則った失語症のみかた		
	4	情報収集	初回面接、言語面・関連職種からの情報収集、病歴の取り方、神経学的診察の手法、画像診断、その他の検査		
	5	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	聞く側面		
	6	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	話す側面		
	7	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	読む側面		
	8	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	書く側面		
	9	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	数的処理について		
	10	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	全体を通して		
	11	問題点の抽出	収集した情報、検査結果より問題点を抽出する		

	12	目標設定と訓練計画	将来を見通して目標と達成するステップを考える
	13	評価サマリーの作成	情報を統合、問題点を抽出してサマリーにまとめる
	14	評価サマリーの作成	情報を統合、問題点を抽出してサマリーにまとめる。
	15	鑑別診断	関連する障害との鑑別診断について

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	言語聴覚障害概論Ⅱ		担当教員	松山 大輔	
対象年次・学期	2年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	・各授業で学んだ知識や評価技術を確認し、報告書・サマリーの書き方を学ぶ。 ・1年次で学習した国家試験頻出科目を振り返り、関連問題を解きながらグループワークを通して知識の蓄積を図っていく。				
到達目標	・主にグループ学習を通して、評価実習や国家試験に向けて効果的な学習理解を進める。				
テキスト・参考図書等	特に指定しない				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	評価内容		模擬試験及び提出物によって評価する (模擬試験は実習終了後、提出物は評価実習前)		
	評価内容				
	評価割合	50			
	評価割合	50			
履修上の留意事項	・例年、長期実習ではデイリーや報告書の完成に難渋している。専門用語や評価技術の知識は必須である。 ・新カリキュラムとなり、国家試験の出題基準は浮動的である。早期から真剣な取り組みが必要となる。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	見学実習の振り返り・評価とは	デイリーの供覧、評価実習とは		
	2	見学実習の振り返り・評価とは	デイリーの供覧、評価実習とは		
	3	失語症・高次脳機能障害	デイリーを供覧しながら着眼点を学ぶ、ペーパーペイシエントで実践		
	4	失語症・高次脳機能障害	報告書を供覧しながら着眼点を学ぶ、ペーパーペイシエントで実践		
	5	構音障害	デイリー・報告書を供覧しながら着眼点を学ぶ、ペーパーペイシエントで実践		
	6	摂食嚥下障害	デイリー・報告書を供覧しながら着眼点を学ぶ、ペーパーペイシエントで実践		
	7	小児	デイリー・報告書を供覧しながら着眼点を学ぶ、ペーパーペイシエントで実践		
	8	成人各障害に対するスクリーニング、初回評価	各症例に対するスクリーニングから評価をどのように進めていくか		
	9	基礎医学（医学総論、解剖学、病理学、生理学）	国試出題分野の振り返り、当該科目の国試過去問実施後にグループワーク		
	10	基礎医学（医学総論、解剖学、病理学、生理学）	国試出題分野の振り返り、当該科目の国試過去問実施後にグループワーク		
	11	聴覚障害	国試出題分野の振り返り、当該科目の国試過去問実施後にグループワーク		
12	聴覚障害	国試出題分野の振り返り、当該科目の国試過去問実施後にグループワーク			

	13	失語症・高次脳機能障害	国試出題分野の振り返り、当該科目の国試過去問実施後にグループワーク
	14	失語症・高次脳機能障害	国試出題分野の振り返り、当該科目の国試過去問実施後にグループワーク
	15	心理学	国試出題分野の振り返り、当該科目の国試過去問実施後にグループワーク

授業科目	言語聴覚障害概論Ⅱ	担当 教員 実務 経験	松山大輔 有：■ 無： □	道内急性・回復期病院で言語聴覚士として5年間勤務
対象年次・学期	2年・通年	担当 教員	北風祐子 有：■ 無： □	道内病院で言語聴覚士として20年以上勤務し、養成校にて15年以上勤務
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験	佐々木勇輝 有：■ 無： □	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年勤務
		担当 教員 実務 経験	阿部由美 有：■ 無： □	言語聴覚士として市内病院にて14年、訪問看護ステーションにて4年、養成校にて4年勤務
		担当 教員 実務 経験	埜瀬充功 有：■ 無： □	道内病院で言語聴覚士として7年勤務
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	歯科口腔外科学		担当教員	高師 則行	
対象年次・学期			必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	8回	時間数
授業目的	歯・口腔・顎・顔面領域の障がいに対する歯科医学的治療を学ぶ				
到達目標	・口腔・顎・顔面領域の疾患と治療の流れを理解する ・構音や咀嚼に対する歯科医学的治療法を理解する				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		定期試験により評価を行う。		
	評価内容				
	評価割合	100			
	評価割合				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	口腔・顎・顔面領域の嚢胞、腫瘍、類似性疾患、悪性腫瘍などの外科的処置後の再建と機能回復	各疾患の病態について		
	2	口腔・顎・顔面領域の嚢胞、腫瘍、類似性疾患、悪性腫瘍などの外科的処置後の再建と機能回復	各疾患の病態について		
	3	唾液腺疾患 口腔乾燥症 口腔粘膜疾患 顎関節疾患 口腔・顎・顔面の神経系疾患 加齢による口腔機能障害と歯科医学的対応	各疾患の病態について		
	4	唾液腺疾患 口腔乾燥症 口腔粘膜疾患 顎関節疾患 口腔・顎・顔面の神経系疾患 加齢による口腔機能障害と歯科医学的対応	各疾患の病態について		
	5	口腔顎顔面の損傷	口腔軟組織損傷、歯・歯槽骨損傷、顎骨骨折		
	6	形成外科	潰瘍、熱傷、褥瘡、肥厚性瘢痕、瘢痕拘縮、植皮と皮弁		
	7	口腔・顎・顔面の先天異常	先天異常の成因、口腔顎顔面先天異常の各種病態		

	8	口唇・口蓋裂	口唇口蓋裂の成因、病態、診断、治療
--	---	--------	-------------------

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
----------------------	--	--

授業科目	論理学		担当教員	藪 貴代美		
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態			授業回数	15回	時間数	
授業目的	言語聴覚士に求められる論理的思考や科学的思考を通して、臨床推論やレポートや報告書を書く力を習得する。					
到達目標	(1) 主張・根拠・結論を区別して考え、論理的に説明できる (2) 臨床場面の情報を整理し、仮説を立てて検討できる (3) 科学的根拠（エビデンス）を意識した思考ができる (4) 論理構造を意識したレポート・報告書が書ける (5) カンファレンスや発表で、簡潔かつ筋道立てて話せる					
テキスト・参考図書等	配布資料その他					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準			
	評価内容		定期試験、提出物を総合的に評価を行う。			
	評価内容					
	評価割合	80				
	評価割合	20				
履修上の留意事項						
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容			
	1	オリエンテーション	なぜ言語聴覚士に論理学が必要なのか			
	2	論理的思考の基本構造	「主張・根拠・結論」を見分ける			
	3	論理の型①	演繹法・帰納法・仮説思考			
	4	論理の型②	因果関係と関連の違い			
	5	論理的に「整理する」技術	情報を構造化する			
	6	科学的思考の基礎	科学とは何か、なぜ臨床に必要なか			
	7	批判的思考（クリティカルシンキング）	情報をうのみにしない、バイアス（先入観）が評価結果をどう歪めるか。			
	8	臨床推論	評価結果から仮説を立てる、複数の可能性を考える			
	9	情報の整理術	もれなく、重複なく。患者の問題点を階層化して整理する手法。			
	10	論理的な文章の書き方①	レポートの基本構造			
	11	論理的な文章の書き方②	臨床報告・実習記録の書き方			
	12	説明する力①	カンファレンスで伝える論理			
	13	説明する力②	発表・スピーチの基礎			
	14	事例検討	臨床ケースを論理的にまとめる			
	15	まとめと振り返り	論理的思考を臨床でどう使うか			

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	リハビリテーション医学	担当教員	本間 俊一		
対象年次・学期		必修・選択区分		単位数	
授業形態		授業回数	8 回	時間数	15 時間
授業目的	治療医学とは視点の異なるリハビリテーション医学の考え方、診断、治療などを学ぶ。				
到達目標	・ ICF に基づいたリハビリテーションの考え方を理解する ・ 機能障害の評価方法について知る ・ 疾患ごとのリハビリテーションの考え方、チームアプローチについて理解する				
テキスト・参考図書等	(教) わかりやすいリハビリテーション 著者名：岡島康友 発行所：中山書店				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		定期試験により評価を行う。ただし、今後、医療従事者として勤務するにあたり不適切な回答内容及び授業態度と思われる方には点数に関わらず単位を付与しない可能性もあります。		
	評価内容				
	評価割合	100			
	評価割合				
履修上の留意事項	欠席せず、よく復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	リハビリテーション概論・リハビリテーションのための基礎知識	理念・対象と方法、ICF 分類、運動の解剖学、神経生理学、代謝生理学		
	2	機能障害の評価①	運動障害と歩行、関節可動域、体性感覚と疼痛		
	3	機能障害の評価②	高次脳機能障害、意識障害、呼吸と循環、排せつ、成長と発達		
	4	日常生活動作（ADL）	ADL の概念・評価、ADL の予後診断、介助の実際		
	5	リハビリテーション治療①	物療、運動療法、作業療法		
	6	リハビリテーション治療②	義肢・補装具、工学的アプローチ、チームアプローチ、在宅リハ		
	7	主な疾患のリハビリテーション①	脳損傷、神経・筋疾患、末梢神経障害、脊損、切断、骨・関節疾患、小児（CP、筋ジス、二分脊椎）		
	8	主な疾患のリハビリテーション②	呼吸器疾患、循環器疾患、自己免疫・膠原病、がんのリハビリテーション		

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	小児科学	担当教員	土畠 智幸		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数		時間数	
授業目的	「子どもは小さな大人ではない」。子どものからだの特徴、子ども特有の疾患・病態について学ぶ。また、近年その重要性が増している障害児の問題、障害児に対する医療の提供体制について重点的に学ぶ。				
到達目標	正常発達について学ぶ ・子どもに特有の疾患・病態を正しく理解する ・障害児を取り巻く医療的問題について学ぶ				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士のための基礎知識 小児科学・発達障害学 第3版 著者名：宮尾益知編 発行所：医学書院 (参) 障害児者の摂食・嚥下・呼吸リハビリテーション その基礎と実践 著者名：金子芳洋監修、尾本和彦編 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	講師の都合により、履修主題の順序が変更になることがある。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	小児の発達・成長、小児保健、小児疾患の診断法	発達・成長を含め、小児のみかたについて学ぶ		
	2	遺伝疾患と先天異常、新生児疾患	新生児を取り巻く問題について学ぶ		
	3	神経・骨・筋肉疾患	神経の異常や、筋力低下を招く疾患について学ぶ		
	4	循環器疾患、呼吸器疾患	心臓と呼吸の疾患について学ぶ		
	5	感染症、消化器疾患	感染症と消化管の疾患について学ぶ		
	6	内分泌・代謝疾患、免疫・アレルギー疾患・膠原病	複数の臓器に影響する疾患について学ぶ		
	7	腎・泌尿器・生殖器疾患、血液疾患・悪性腫瘍	腎臓と子どものがんについて学ぶ		
	8	心身症・神経症、眼科・耳鼻科疾患	こころの問題と周縁領域疾患について学ぶ		
	9	障害児学 1	障害児を取り巻く環境と障害児学、運動機能とその障害について学ぶ		
	10	障害児学 2	知的障害、言語障害、感覚器障害について学ぶ		
	11	障害児学 3	重複障害児、重症心身障害児、障害と認識されにくい「困難」などについて学ぶ		
	12	障害児学 4	発達障害の概念の変遷と診断について学ぶ		
	13	障害児学 5	発達障害の評価とその実施法について学ぶ		

	14	小児在宅医療における 多職種連携 1	小児在宅医療における多職種連携について学ぶ
	15	小児在宅医療における 多職種連携 2	小児在宅医療における多職種連携について学ぶ

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	摂食嚥下障害演習	担当教員	山下 奉位		
対象年次・学期	2 年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	
授業目的	摂食・嚥下に関する検査練習、結果解析を行う。検査結果と総合的な情報収集から、適切な目標設定、治療プログラムを立案する知識を身につける。				
到達目標	・スクリーニングテストの手順を理解し実施できる ・各種検査の意味を理解し解析、統合できる ・得た情報と検査結果を総合して嚥下の評価ができる。				
テキスト・参考図書等	(教) 摂食嚥下障害学 第1版 著者名：倉知雅子 著 発行所:医歯薬出版 (教) 嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名：聖隷嚥下チーム 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		・定期試験 80% ・小テスト 20%		
	評価内容				
	評価割合	80			
	評価割合	20			
履修上の留意事項	実践的な授業です。臨床に生かせるように積極的に参加すること				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	嚥下評価の概要	嚥下評価の意義と目的		
	2	スクリーニングテスト	反復唾液飲みテスト (RSST)について・改定水飲み検査 (MWST)について		
	3	スクリーニングテスト	RSST、MWST の練習		
	4	食事姿勢の概念	姿勢評価・食事するための姿勢調整		
	5	スクリーニングテスト	フードテスト (FT)について		
	6	統合と解釈	フィジカルアセスメント		
	7	統合と解釈	栄養学的評価		
	8	統合と解釈	RSST、MWST の意味すること		
	9	統合と解釈	RSST と MWST、FT の関連		
	10	統合と解釈	VF、VE の見方 (1)		
	11	統合と解釈	VF、VE の見方 (2)		
	12	統合と解釈	症例で結果の解釈と問題点の抽出		
	13	治療プログラム	治療方法		
	14	口腔ケア	口腔ケアの意義・口腔評価		
	15	介助者への指導	食事介助方法、適切な食形態、トロミ実習		

授業科目	摂食嚥下障害演習	担当 教員 実務 経験	山下 奉位 有：■ 無： □	道内病院にて 21 年、言語 聴覚士として勤務
対象年次・学 期	2 年・後期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	耳鼻咽喉科学		担当教員	實川 純人	
対象年次・学期	2 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	言語聴覚士の業務に密接な耳鼻咽喉科疾患の、病態と診断、治療学について学び、必要な知識を身につける。				
到達目標	・ 耳科関連の疾患の特徴と治療について知る。・ 鼻科関連の疾患の特徴と治療について知る。・ 頭頸部外科領域の疾患の特徴と治療について知る。				
テキスト・参考図書等	(教) 病気がみえる vol.13 耳鼻咽喉科 MEDIC MEDIA				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	評価内容		定期試験にて評価を行う		
	評価内容				
	評価割合	100			
	評価割合				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	耳科学	聴覚系の解剖、生理、検査		
	2	耳科学	手術、遺伝子診断		
	3	耳科学	疾患の症候・診断・治療		
	4	耳科学	前庭機能の基礎と臨床		
	5	鼻科学	鼻・副鼻腔の基礎と臨床①		
	6	鼻科学	鼻・副鼻腔の基礎と臨床②		
	7	喉頭科学	喉頭、音声の基礎と臨床		
	8	気管・食道科学	気管食道口腔咽頭の基礎と臨床		
	9	頭頸部腫瘍学	頭頸部腫瘍の基礎と非手術治療		
	10	頭頸部腫瘍学	頭頸部腫瘍の手術治療と術後機能		

担当 教員 実務 経験		
----------------------	--	--

授業科目	小児言語・コミュニケーション障害Ⅱ		担当教員	佐々木 勇輝	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	神経発達症について全般的に学び、支援の枠組みについて考える。				
到達目標	① 神経発達症（自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、限局性学習症）の概要を理解する。 ② 検査の目的を学ぶ。 ③ 神経発達症の支援方法を考える。				
テキスト・参考図書等	（教）標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第4版 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合（%）	評価基準		
	評価内容	定期試験	定期試験・小テストを合わせて評価を行う。		
	評価内容	小テスト			
	評価割合	90			
	評価割合	10			
履修上の留意事項	欠席せず、教科書および授業で配布された資料、授業のメモに基づき理解を深めること。 授業で実施する国家試験形式問題を解けるようになること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	自閉スペクトラム症について	定義・歴史・基本的概念		
	2	自閉スペクトラム症について	診断基準(DSM-5)・言語発達等の特徴		
	3	自閉スペクトラム症について	他の障害との関係、有病率 認知特性について（心の理論・中枢性統合・実行機能）		
	4	自閉スペクトラム症について	評価(診断検査・スクリーニング検査・関連検査)		
	5	自閉スペクトラム症について	支援の原則、TEACCH プログラム、PECS、SST などの支援法について		
	6	注意欠如多動症について	定義・歴史・基本的概念		
	7	注意欠如多動症について	診断基準（DSM-5）・治療法など		
	8	注意欠如多動症について	評価（ADHD-RS、Conners3 等）、支援法について		
	9	限局性学習症について	限局性学習症のタイプ ディスレクシアについて		
	10	限局性学習症について	読み書きの定型発達と必要な能力 算数障害		
	11	限局性学習症について	評価（STRAW-R、URAWSSⅡ 等）		
	12	限局性学習症について	支援（ひらがな、漢字の音読・書字訓練）		
	13	神経発達症関連	家族支援、児童福祉法、発達障害者支援法の理解		
	14	事例検討	各障害の評価支援法の検討をグループワークで実		

			施
	15	神経発達症全般	国家試験問題を解く

[illegible]

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

授業科目	臨床実習Ⅱ	担当教員	阿部 由美		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	0回	時間数	160時間
授業目的	学内での知識技術の習得、および臨床実習Ⅰにおいて学んだことを活用し、症例を通じて情報収集、評価・記録、目標設定までの過程を学ぶ。				
到達目標	対象者とのラポートを形成し、評価を通して、対象者の問題点を抽出し、障害像を把握、適切な目標設定ができる。 臨床教育者の指導の下、適切なデイリー、評価報告書の作成ができる。				
テキスト・参考図書等	特に指定しない。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		臨床教育者の評価と学科教員の評価を合わせて総合的に評価する。		
	レポート		評価項目（実習施設）		
	小テスト		1、医療者としての資質・適性 2、信頼関係の形成 3、適切な評価の選択と実施、分析 4、訓練計画の立案		
	提出物		評価項目（学校）		
	その他	100	1、実習前準備 2、提出物 3、実習後の発表 実習施設 60%、学校 40% 200点満点中 120点以上を合格とする。		
履修上の留意事項	患者を第一に考え、実習指導者を通して自らの課題が解決できるように積極的に実習に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1		1 症状を把握し、習得した知識や技術と照合し検討することができる。 2 言語聴覚療法において必要な検査を選択し、評価を実施することができる。 3 評価の結果から問題点を抽出して目標設定、プログラム立案を行い、適切な評価報告書を作成することができる。 4 実習報告会を実施し、内容を伝達することができる。		

授業科目	臨床実習Ⅱ	担当 教員 実務 経験	松山大輔 有：■ 無： □	道内急性・回復期病院で言 語聴覚士として5年間勤務
対象年次・学 期	2年・後期	担当 教員	北風祐子	道内病院で言語聴覚士とし て20年以上勤務し、養成 校にて15年以上勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無： □	
		担当 教員 実務 経験	佐々木勇輝 有：■ 無： □	道内児童福祉施設にて言語 聴覚士として6年勤務
		担当 教員 実務 経験	阿部由美 有：■ 無： □	言語聴覚士として市内病院 にて14年、訪問看護ステ ーションにて4年、養成校 にて4年勤務
		担当 教員 実務 経験	埜瀬充功 有：■ 無： □	道内病院で言語聴覚士とし て7年勤務
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

担当 教員 実務 経験		
--------------------------	--	--

